

「世界難民の日」に寄せて

緒方貞子

元国連難民高等弁務官

2000年の国連総会が6月20日を「世界難民の日」と定めて以来、この時期には難民問題に関する催しが世界各地で企画されるようになりました。紛争、テロ、エイズ、環境破壊など、地球規模で取り組むべき様々な問題がありますが、そのひとつが難民問題なのです。

私は、1990年代の10年間国連難民高等弁務官として、難民や避難民として故郷を離れなければならない人々の問題に直接関わりました。東西冷戦後の世界では、バルカン半島やアフ

同じ地球に生きる人間としての連帯感を

リカ各地などで民族、部族、分断独立をめぐる武力紛争が起き、UNHCRはその犠牲者への援助活動の先頭に立ちました。今もなお世界各地に犠牲者を生み出す

紛争や迫害があり、戦禍からの復興に苦勞している人々がいるのです。日本にいくと、残念ながらこのような世界の動きを現実のものとして感じる機会が少なくなってしまう。日本国内でも貧

富の格差が広がりがつつあると言われていますし、移民や外国人労働者の差別や権利の問題が取り上げられる機会が増えています。しかし、一般的には恵まれた社会で暮らしているため、世界的に関心をよんでいる社会的、

政治的問題に対する意識が育ちにくいかもしれません。だからこそ、日本人は進んで世界各地にある厳しい状況を心に寄り添い、そこに身を置く努力をしなければならぬのではないのでしょうか。私もアフリカと関わりを

持ったのは、難民高等弁務官になってからです。この仕事に就かなければ、アフリカ諸国の現実を知ることもないままに、生きていた

私には、国内外を問わず、自分で歩いてみることを若い世代にもすすめてあげたいです。私には、何度か味わった経験が私

ちに影響するということを感じなければなりません。人間が生きるうえで一番大切なことは、人生という与えられた時間の中で、自分を十分に活かして生きていくことだと思えます。誰もがそんな人生を送れるように、みんなが地球に共に生きる人間としての連帯感を持って、どこかで苦しんで

いる人にも思いを寄せていくことが大切なのです。「世界難民の日」が、難民に関わる機会となれば幸いです。

プロフィール

1927年東京生まれ。カリフォルニア大学バークレー校で政治学博士号取得。国連公使、国連人権委員会日本政府代表などを歴任後、91年2月から00年12月まで第8代国連難民高等弁務官。03年より独立行政法人国際協力機構理事長。



1995年、ザイル(現コンゴ民主共和国)のルワンダ難民キャンプにて UNHCR/P. Mountzis

いる人にも思いを寄せていくことが大切なのです。「世界難民の日」が、難民に関わる機会となれば幸いです。